

平成 27(2015)年度

NGO 海外スタディ・プログラム最終報告書

| | |
|------------|---|
| 提出日 | 2016年3月11日 |
| 氏名 | 竹内 弥生 |
| 所属団体(正式名称) | 特定非営利活動法人日本イラク医療支援ネットワーク |
| 受入機関名(所在国) | ヌールーズファンデーション(アメリカ合衆国) |
| 研修期間 | 2016年2月1日～2016年3月10日 |
| 研修テーマ | ヤジディ教徒の性暴力被害者を救出するために、紛争下における女性の性暴力に対するケアとアドボカシーについて手法を学ぶ |

1. 導入(研修にあたっての問題意識、課題における仮説、検証の方法など)

1-1 研修にあたっての問題意識

JIM-NET はイラクの小児がん支援を中心としているが 2012 年からシリア難民支援を行ってきた。2014 年からイラクの国内避難民支援を開始し、その中でヤジディ教徒の支援を実施してきた。イラク北部のヤジディ教徒は 2014 年に「イスラム国」に襲撃され、6000 人を超える女性や子供らが奴隷として囚われた。JIM-NET が活動する地域でも避難してきたヤジディ教徒を多くみかけるようになった。中でも暴力や性的虐待にあった女性は、精神的にも傷ついており、被害者の希望に応じて怪我の治療や妊娠検査、性感染症の検査に連れていくなどの支援をしてきた。また、被害者から聞き取り調査を行い、日本国内でヤジディ教徒の被害の現状について報告会を開催するなどしてきた。JIM-NET では、医療支援を中心としてきたが人権問題を扱ってきた経験が少なく、また女性の性被害というセンシティブな問題に対して現地でどのように支援や調査を行い、また国際的に訴えていくための戦略的なアドボカシー活動について検討していく必要があると考えた。

1-2 課題における仮説

アメリカ合衆国は、国連の本部を置き、世界情勢、経済的の中心であることから、人権問題の問題解決にはアメリカに働きかけることが重要である。その証拠としてヒューマンライツウォッチやアムネスティに代表されるような国際人権 NGO の多くが、国連のある NY と国会のあるワシントン DC にオフィスを持つ。今回研修の受け入れ先となったヌールーズファンデーションは、アメリカに拠点を置き、小規模であるが当事者に近いところで活動しており成果をあげている。その成果の要因は何かということ学び、JIM-NET でも応用できることを考える。またその他のヤジディ教徒を支援する団体からも話を聞くことで、ヤジディ教徒の支援には何が必要とされているかを考察する。加えて国際人権 NGO の経験を基に効果的なアドボカシーの手法についても考えていく。

2. 本文(研修テーマについて明らかになったこと、立証)

受入研修先となったヌールーズファンデーションでインターンを経験した。また国際的に活動する人権系 NGO を訪問し話を聞いたり、イベントに参加した。その中で以下のことがわかった。

■ヌールーズファンデーション

ヌールーズファンデーション=Norooz Foundation(以下 NF)は、2004年3月21日にバハマン・マリザデ(Bahman Maalizadeh)氏によって設立される。アメリカのノースカロライナ州に本部を置く。バハマン氏がトルコに旅行中にジャーナリストに一人のイラン難民を助けてほしいと頼まれ、

[Type here]

資金援助をしたことを契機として、イラン難民の支援を目的として設立した。ちょうど設立日がヌールーズというイラン歴の元旦に当たり、その言葉が「新しい日」という意味でもあったため、難民にとって新しい日が訪れるようにという願いをこめて団体名をつけた。

NFの人員構成は代表のバハマン氏のほか、フルタイムの事務局スタッフが1名、トルコ事務所1名、写真や動画などの編集をするIT&メディアスタッフ、NFのTVで番組の司会者である。同団体はこれまでトルコ、イラク、アフガニスタン、インド、ヨルダンのイラン難民を支援してきた。現在の活動の中心はトルコ、イラク、アフガニスタンである。最近ではイラン難民だけではなく、イラク北部のヤジディ教徒の支援に活動を広げている。

NFのドナーは主にイラン系アメリカ人のコミュニティである。NFの持つイラン系アメリカ人向けのTV番組で、活動や難民の現状を紹介し多くの賛同者を得ている。1979年のイラン革命後に移民または難民としてアメリカに移り住んだ人が多く、イラン難民の支援に対して協力的である。またヤジディ教徒に対しては「イスラム国」から迫害を受けているということで境遇が似ており、支援者からの共感を得ている。番組で、支援者を紹介するなど支援者と団体の距離が近い。毎年ヌールーズの時期は募金が集まりやすいため、1年以内に支援してくれた人々に手紙を送り募金をよびかけている。

NFは、影響力のある関係者とのつながりがある。イラクの国会議員でヤジディ教徒のビヤン・ダヒル氏とその兄弟サイード・ダヒル氏（シンジャールファンド代表）、ヤジッド教徒のジャーナリストのナリーン・シャモ氏と連絡を取りあっている。ナリーン氏は、「イスラム国」に誘拐されたヤジディ教徒女性の解放のために活動しており、BBCなどでも紹介された。

(<https://www.youtube.com/watch?v=bO1r0s2mw1k>)しかし、メディアでの知名度をあげたため次第に「イスラム国」に狙われるようになり、現在はヨーロッパに逃れている。また医療関係の協力者としてスエーディッシュホスピタルとつながりがある。また他のヤジディ教徒を支援する団体のメンバーをヤジディ教徒の避難者が多く避難しているシンジャールに案内している。

NFの主な支援方法はイラン難民とヤジディ教徒への物資配布や薬の調達などであるが、ヤジディ教徒への大規模なプロジェクトの立ち上げを計画している。その具体的な内容は、避難してきたヤジディ教徒の聞き取り調査、精神的被害の状況調査、ヘルスケアの体制の確立、一時的なシェルターの提供、女性の教育のためのセミナーと研修の実施、性的被害にあった女性に関して男性も含めた市民社会の教育、雇用の創出などである。

中でもNFは雇用の創出に注目している。バハマン氏は精神的ダメージの回復には、労働力の提供が必要であると考えている。なぜなら一定のリズムによって行う手作業はうつ病などの治療にも効果的であり、また「イスラム国」によって夫や両親を亡くし、一家の担い手となった女性にとって働き口を支援することは将来への不安の軽減につながると考えられるからである。

考察：研修中はバハマン氏のカリフォルニア出張に同行し、ヌールーズファンデーションのTV番組に出演する機会を頂いた。またバハマン氏の話し方などを見て、どのようにしたら視聴者に伝わる説明ができるかについて非常に勉強になった。また番組内では募金者の名前を読み上げるなどしていた。募金者との距離の近さを感じた。

また後述するフリーダムハウスを訪問した時には、同席したバハマン氏は「イスラム国」から逃れて来たヤジディ教徒が緊急支援を必要としていることを説明し、女性達がこのプログラムで資金を受給できるか確認していた。また、このプログラムは基本的に資金的な援助に特化しているため、バハマン氏は避難してきた女性達が医療を受けられるようにスエーディッシュホスピタルを紹介していた。即座にNGO同士の支援の連携を提案しており参考になった。

■イザディ・リリーフ・ファンド=Ezadi Relief Fund（以下EF）

残念ながら都合があわず直接団体を訪問することはできなかったが、電話会議で聞き取りをした。

[Type here]

EFはヤジディ教徒のルーシー・ウソヤン氏によって設立される。ドナーは主に北米のクルド人コミュニティである。

現地での支援方法は金銭的、食料、衣料などの物資支援、シェルターの提供、医療、教育、ヤジディ教徒の救出などを行っている。また長期計画として病院の建設を計画している。性的虐待を受けたヤジディ教徒の女性の精神的ケアとしてEFは精神科医を雇用している。またEFは被害者への精神的なケアだけではなく、ヤジディ教徒のコミュニティの教育が重要であると考えている。イラク北部のヤジディ教徒のコミュニティは保守的であり、性的被害にあった女性は自殺してしまうことが多い。これはPTSDによるものだけではなく家族が自殺を強要する場合もあることが原因と考えられる。またヤジディ教徒の女性は基本的な教育を受けていないことも多く、彼女達の教育の提供も行っている。

捕らわれたヤジディ教徒の解放に向けて現地で活動する団体が地元のアラブ人に協力を得て交渉にあたっている。同時に避難してきたヤジディ教徒を救出している。

EFはワシントンDCにオフィスを持ち、議員への働きかけを行っている。また議員と学生向けの会議などを設定し、ヤジディ教徒の現状の理解を促し支援の必要性を訴えている。

考察：ヤジディ教徒の性被害を受けた女性の支援にはコミュニティの教育が必要であるということは、非常に納得がいく。しかし同時に解決には時間がかかり難しいことである。このプロジェクトはヤジディ教徒が主体となって行う必要があると感じた。

■フリーダムハウス=Freedom House（以下 FH）

アメリカのワシントンDCにオフィスを持つ人権NGOである。今回ワシントンDC滞在中に訪問し、FHの実施するReligious Freedom Fundというプログラムを紹介された。同プログラムは宗教的迫害を受けた人々が避難してきたときの最初の3-6か月の生活費や医療費などを支援する。または、宗教迫害に対して抗議するローカルNGOのアドボカシーを支援する。

個人のプログラム受給希望者は、フォームに必要事項を記入し、支援が必要な項目に対して予算を立てる。また推薦者が2人必要である。自分でフォームを入力することができない場合は第三者が代わりに記入してもよい。ただしその場合、代筆者は推薦者にはなれない。

考察：Religious Freedom Fundは短期の財政的支援ではあるが、宗教的差別を受けて避難してきた人々にとって次の生活の足掛かりとなる重要な支援であると感じた。また明確な基準と推薦者制度を設けることにより、優先順位度を測ることができる。しかしその一方で、緊急に支援を必要としている人には不向きであり、細かい申込の方法についてサポートを受ける人が理解できない、または申込の記入をサポートしてくれる人がいないなどの問題も考えられる。

■フィジシャンズ・フォー・ヒューマンライツ=Physicians for Human Rights（以下 PHR）

医療と人権問題に取り組む非営利団体である。今回はNY本部とボストンオフィスのスタッフと話をした。PHRは30年以上の活動経験を持つ。NY、ワシントンDC、ボストン、ケニア、コンゴにオフィスを持つ。またトルコにスタッフがいる。ラスベガスとフロリダに研修施設がある。ボストンを本拠地としていたが4年前にNYに本部を移した。NYに本部を移したのは、国連があると同時に他の国際NGOが多数存在するからである。残念ながらヤジディ教徒の問題には取り組んでいないが紛争下の性的被害者に対しての専門のチームがボストンにある。ワシントンDCでは議員への働きかけを行っている。

PHRは、国境なき医師団のような直接の医療の現地での支援は行っていない。方法としては現地に医療関係者を送り現場の医療従事者と調査者のトレーニングを行う。アメリカから医療スタッフを現地に送り、現地の医師、看護師、病院、クリニックなどをトレーニングする。

現場で得られた情報を基にアメリカ国内でアドボカシーを行っている。全世界で活動をしているが、特に中東とアフリカに注目している。国内でも収容所の拷問に対して調査し、医療的観点から政府にアドボカシーをしている。またメディアへのコネクションも強い。

PHR には複数の医師や看護師がいる。性的被害者のケアに対する専門の医師がいるなど、極めて特徴的な専門分野を持つ医療スタッフが所属している。現地に派遣される医師だけではなく、運営スタッフも法律と医療の知識をもつなど、医療と人権に対しかなり専門性の高い団体であると感じた。

人権に対して医療という科学的な基準も用いることで文書に中立性を持った説得力のある文章により効果的なアドボカシーを可能にしていると言える。他の人権団体にはない高い専門性を感じた。

調査の方法は独自の基準を用いており、被害者や目撃者のプライバシーに配慮しながら行う。例えば JIM-NET とアドボカシーを共同で行う場合は、JIM-NET からの情報をそのまま文書化するのではなく、PHR から調査者を送り PHR の基準にそった調査方法を行い、その後アドボカシーの方法について PHR と JIM-NET で協議していくことになると言われた。

考察：医療と人権を結びつけた活動をする珍しい団体であると思った。医療という科学的な視点を使用することで、アドボカシーに説得力を持たせている。日本でもこの概念を広め、モデルとなるネットワークを作りたい。

■コンバットペーパープロジェクト

米軍帰還兵が軍服を切り裂き、アートにするプロジェクトである。サンフランシスコから始まり、NY、ニュージャージー州などでも活動する。今回はプリンストン大学で行われている作品展を見学した。ベトナム戦争、イラク戦争の帰還兵は、PTSD などの被害を抱えている人も多く、1日に22人が自殺していると言われている。コンバットペーパーの参加者は基本的に米軍の帰還兵であり、ワークショップでは軍服を切り裂き、繊維にし、紙をつくり、絵やシルクスクリーンなどでアートにする。軍服という戦争の象徴的なアイテムを破壊し、アートに変えていくことで、自己を客観的に見つめ、自分を取り戻していく。

考察：作品からは、帰還兵は社会から偏見を持たれることも多く、心情を理解されない苦痛を経験していることが感じ取れた。このプロジェクトは帰還兵同士がつながる場の提供、そして本人の精神的ダメージの回復だけではなく、市民社会が帰還兵の心情を理解し、同時に戦争のもたらす悲惨さを伝える画期的なものであると感じた。

■イラン系アメリカ人女性リーダーシップ会議 (Iranian American Women's Leadership Conference)

イラン系アメリカ人女性会議にブース出展し、活動を紹介し寄付を呼びかけた。このイベントはイラン系アメリカ人がイラン人としての個性を発揮しながら、キャリア形成していくことを応援することを目的としている。イラン系アメリカ人のアーティストやイラン難民を支援する NGO など多くブースを出しており展示の仕方などが参考になった。

考察：イラン革命の影響でアメリカに移民しているイラン人は、現在のイランに対して複雑な心境であると思われる。アメリカの文化に影響されながらも、イラン人としての文化や個性を確立していくことは、彼女達のアイデンティティの確立にもなる。今後ヤジディ教徒の女性達が難民や移民としてイラク国外に移り住んだ時、宗教的、文化的な差異を個性として表現できるような寛容な社会を確立できるようなサポートも必要であると感じた。

3. 考察・提言

3-1 結論

[Type here]

・ヌールーズファンデーションが成果をあげている理由

研修を通して見えてきたことは、NFが成果をあげている理由はネットワーク力とメディアへのプレゼンスである。代表のバハマン氏は団体と人、団体と団体のニーズと支援を即座にマッチングさせる判断力と行動力に長けている。団体の成果をあげることを重視せず、他の団体や協力者と連携することで支援がより多くの人々に効率的に行き届くようにしており、そのことが団体の信頼性を高める結果にもなっている。しかし今後大規模なプロジェクトを行うには、人員の増加や、綿密な事前調査などが必要だと考えられる。

・ヤジディ教徒の支援団体はなぜ連携しないのか

NFは現地のいくつかの団体や関係者と関わりがある一方で、アメリカ国内においてヤジディ教徒の支援団体同士のつながりは少ないように感じた。その理由としてはシリアのクルド政党、イラクのKDPのように地域が政党によって分離され、支援も政党によって管理されているため、支援するときはその傘下で活動せざるをえない。政治的な背景が障壁となって連携が難しくなっているように思われる。

・精神的ケアとコミュニティの教育

現在最も必要とされているのは、精神的な医療ケアである。ニュースでも取り上げられているように性的被害を受けたヤジディ教徒の女性は「イスラム国」と戦うために、[イラク領クルディスタン自治政府](#)が保有する[軍事組織](#)ペシュメルガや[クルド人](#)の独立国家建設を目指す武装組織クルディスタン労働者党（PKK）などの軍隊に入るケースも多くみられる。ペシュメルガは、ヤジディ教徒の女性を積極的に受け入れている。なぜならば、加害者への憎しみも強いので、兵士としては闘うモチベーションにつながりやすいからである。しかし、それは暴力の連鎖にしかならず女性達が更に傷つく可能性がある。NFは被害にあった女性達を軍隊に送るのではなく、職業を見につけさせ社会に戻していくことを目指しており非常に共感できる。またNFもEFも性的暴力の被害者とコミュニティの両方に教育が必要であると提唱している。性的被害にあった女性達が自分たちを肯定できるようなカウンセリング、そして彼女達を受け入れていくようコミュニティを教育していくことが必要である。しかし一方でコミュニティの教育は、新たな価値観を与えることになり、コミュニティを破壊、または分断する恐れがある。このためプロジェクトは現地のヤジディ教徒の意見を尊重すると同時に、プロジェクト運営もヤジディ教徒が主体となり、慎重に行う必要がある。

・アドボカシーとプライバシー

またアドボカシーの方法として被害者女性が公の場に出ることがあるが、ヤジディ教徒の女性への偏見、被害者自身の精神的ダメージを悪化させないような配慮、また二次的被害に遭わないようセキュリティを高めるなどの注意が必要である。支援の必要性を訴えていくために、印象づけることは必要であるが過剰にならないよう慎重に行うべきである。こうした問題を避ける為にも国際人権 NGO にアドバイスを求めている。

3-2 本研修成果の自団体、NGO セクターの組織強化や活動の発展への活用方針・方法

・自団体への活用方針・方法

- 動画の活用：NFのホームページはシンプルであるが動画がトップページにある。また写真もミッションごとに分類されており視覚的にどんな支援をしているかがわかりやすい。これらの動画は、NFがTV番組で現地の様子を紹介する時にも使われている。また、HPの動画を見たメディアが取材を依頼してくることもあり、動画のインパクトは非常に有効

であると感じた。またヌールズファンデーシヨンの動画では、バハマン氏が視聴者に状況を説明し、語りかけている。JIM-NETでもHPで動画や写真を見やすく配置するなど工夫をしたい。また動画を作成する際も視聴者にとってわかりやすいものを作成するよう心がける。ヌールズファンデーシヨンのようにTV番組を地上波や衛星で持つことは難しいが、地元のケーブルテレビやインターネットテレビで協力を得られないか。もしくは、You Tubeなどを利用して、より多くの人々がJIM-NETの情報にアクセスしやすい環境をつくりたい。

- 支援にアートを取り入れる：ヤジディ教徒の性的被害者の治療にもコンバットペーパーのようなワークショップを取り入れ、被害者自身の自己肯定感の回復、被害者同士の交流、そして成果としてできたアート作品を通してコミュニティが被害者を理解する方法について模索したい。
- 縫製プロジェクトの支援：NFが計画している縫製プロジェクトについてネットなど紹介し、協力したい。JIM-NETもアルビルでシリア難民の女性達の縫製プロジェクトを行っており、技術的にもサポートできるのではないかと思う。
- イベントの開催：イザディ・リリーフファンドは、市民社会に向けた会議を定期的に行っている。JIM-NETでもヤジディ教徒のバックグラウンドと現状の状況、支援の内容について広く知ってもらうためのイベントを開催する。
- 人権と医療を結びつけたネットワークの形成：JIM-NETも現地のNGO、ヒューマンライツナウのような国際人権系NGOと協力してプロジェクトを進めることで人権的に配慮した支援や調査、客観的な視点が得られ、そして国際社会に訴えていくアドボカシー活動を可能にする。今回得られたアメリカの団体との関係を深め、ヤジディ教徒の支援にいかしていく。国際的に活動をしていくために英語版のWEBサイトやパンフレットを作成する。

・NGOセクターの組織強化や活動の発展への活用方針・方法

ヌールズファンデーシヨンは小規模でありながら成果をあげている。それは代表者のバハマンのパフォーマンスの高さに起因している。昨今のNGOは組織強化が重視されているが、個人の能力強化が後手になっている部分が多いのではないだろうか。それぞれのNGOが強みを持ち、また他のNGOと連携していくことが重要である。

3-3 テーマに関する日本の国際協力分野への提言

・ヤジディ教徒の支援は、政治的な背景を含んでおり難しい側面が見られた。しかし、政治的、宗教的にも中立である日本のNGOが関わっていくことで支援を円滑に行うことができると考える。このことは、他の国や地域でも考えられる。日本は、複雑な宗教や政治の対立する社会において中立性を保ちながら国際協力分野において潤滑油となり、一定の成果を発揮できるのではないだろうか。

・紛争下において女性はいかなる社会でも弱い立場に立たされやすい。全世界的に紛争が続く現在、女性の性被害の問題に対して日本政府として何ができるかを明確にしていくことは、日本の国際協力分野でのプレゼンスを高め、また日本国内で起こり得る問題に備えることにもなる。アメリカの紛争における性暴力の被害者へのケアが進んでいるアメリカの事例も参考にしながら、日本政府として何ができるかNGOとの連携を検討してほしい。

4. 団体としての今後の取り組み方針 (JIM-NET 事務局長 佐藤 真紀)

イラクやシリアで起きている問題の解決には、まずアメリカを動かす必要がある。ヤジディの問題も、イラクの団体がアメリカにも事務所を置き、ロビー活動を行っているのが印象的だった。

[Type here]

2003年のイラク戦争では、日本はアメリカのイラク攻撃を支持したが、戦争そのものの是非は問わず、日米関係がどうなったかが日本の最大の関心事項となっているのは問題である。アメリカが良心的な判断を下さない限り、日本は、米国とともに過ちを繰り返していくのか？日米の市民が一体となってアドボカシーをしていく必要があるが、代表のバハマン氏のキャラクターもあり、強靱なロビーイングを行っている。当団体の規模にも近く、彼らが実践していることは参考になる。今回竹内が築き上げたアメリカの団体との関係をつなげていき、アメリカにも拠点を置きたいと思う。ヤジッド教徒の性暴力の被害状況に関して、JIM-NETとしても現場である程度把握している情報もあるので、人権団体と協力しながら、アドボカシーの方法に関して検討したい。今後、この地域の紛争はしばらく続くであろう。一日も早く紛争が終結するように、被害者の目線に立ち、私たちが、日本政府に外交的な解決方法を提案できるように期待する。

5. その他

5-1 本プログラムや事務局側に対する提案・要望等

本プログラムでは、JANICの皆様には大変お世話になりました。財源が限られている NGOにとってこのように海外で学べる機会を提供して頂けるプログラムには素晴らしく今後も続けて頂きたいと思います。アメリカで研修を受けることにより日本は政治的、宗教的にも中立であり、その特性をもっと国際協力の分野でいかせるのではないかと思います。その人材育成のため、6か月ではなく、1年～2年程度の海外に留学する長期プログラムを提案します。

5-2 写真類及び研修員が受入先機関に提出した報告書類等があれば、添付



コンバットペーパー作品



募金者対応

クルド地域オフィス訪問（ワシントン DC）



カリフォルニアの TV 局に出演



イラン系アメリカ人女性リーダーシップ会議でブースを出した



イラン系アメリカ人女性リーダーシップ会議でアート作品を販売していた女性

以上